

各地で話題の病害虫

ジャガイモ半身萎ちよう病

学名: *Verticillium dahliae* Klebahn

英名: Verticillium wilt

近年、北海道各地でジャガイモの下位葉の黄化、株の片側あるいは全身の萎ちよう、維管束の褐変など半身萎ちよう病と類似する症状を呈する圃場が見られている。従来、北海道内ではジャガイモ半身萎ちよう病として *Verticillium albo-atrum* 及び *V. nigrescens* が報告されていた。しかし、この分離菌は、*V. albo-atrum* 及び *V. nigrescens* とは異



北海道中央農業試験場 角野晶大氏提供

なり、PDA培地上で分生子のほかにも黒色不整形の微小菌核を形成すること、30°Cでも生育が認められることから、*Verticillium dahliae* であることが判明した。道内において *V. dahliae* によるこの病害の発生は初めてのことである。

本病に罹病すると茎葉黄変期が通常に比べ早くなり、塊茎が小さく減収する傾向がみられる。

本病原菌は、多犯性で寄生性の差異によりいくつかの菌群に別れており、今後寄主範囲について明らかにする必要がある。

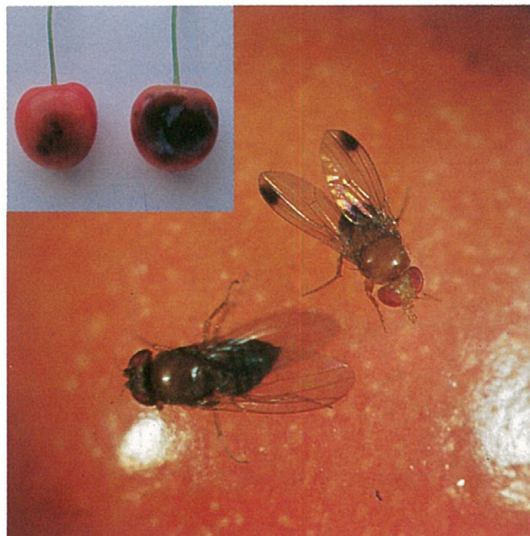
防除対策としては本病が土壌病害であることから輪作、クワトロピクリンなどによる土壌消毒が有効であると考えられている。

オウトウショウジョウバエ

学名: *Drosophila suzukii* Matsumura

英名: cherry drosophila

福島県果樹試験場が県内のオウトウ園内で食餌（清酒5対蜂蜜1の混合液）トラップによる誘殺法と果実調査によって、ショウジョウバエ類の発生調査を行った。トラップ調査では多くのショウジョウバエ類が誘殺され、同定された主な種類は3亜属10種に及び、オウトウショウジョウバエの誘殺が最も多かった。また、果実調査結果でも本



福島県果樹試験場 佐々木正剛氏提供

種の寄生が圧倒的に多かった。

成虫の体長は2.5mm内外で、雄の翅の先端には黒色斑点があり、他種と容易に識別できる。

ショウジョウバエ類の多くは、通常傷果や腐敗果の表面近くに産卵するが、本種の雌には導卵突起に鎌状の歯列があり、健全な果実の果皮を破り産卵することができる。

本種の生活史は、越冬成虫が5月中旬頃からソメイヨシノなどの果実に寄生し、6月上旬から7月中旬までオウトウの果実に寄生する。それ以降は、ブラックベリー、ブルーベリー、ナワシロイチゴなど多くの果実に寄生し、年10回以上発生している。

ウド疫病

学名: *Phytophthora cactorum* (Lebert et Cohn)
Schroter
英名: *Phytophthora rot*

東京都のウド栽培は、地下式軟化室を利用した軟化栽培を主体として行われている。

昭和58年頃から7～8月に冷蔵根株を伏せ込み、8～9月に収穫する抑制軟化栽培で原因不明の腐敗症状が現れはじめた。本症状は軟化茎の発芽直後から発生し、茎の基部から暗褐色～暗灰褐色、水浸状の病斑が急速に進展し、やがて軟化茎は腐敗する。この症状は抑制軟化栽培以外の作型ではほとんど問題にならない。



東京都農芸畜産課 堀江博道氏提供

原因については、当初は生理的な障害と考えられていたが、病理学的検討が行われ、疫病であることが明らかとなった。病原菌は形態的特徴及び温度特性から *Phytophthora cactorum* と同定された。本菌は15～30℃で発病し発病適温は20℃であり、これはウド軟化室の室温17～20℃と一致する。

防除対策としては、本菌を軟化室に持ち込まないことや菌密度を高めないことが重要である。そのため、根株伏せ込み時に健全根株を選別し、芽土は未使用土と定期的に交換すること。また銅・メタラキシル水和剤の根株浸漬処理が有効であると考えられている。

リンゴクビレアブラムシ

学名: *Rhopalosiphum insertum* Walker
英名: apple grain aphid

平成5年5月下旬に宮城県内のりんご園に、葉の先端から内側に大きく巻き込み縮葉するアブラムシによる被害が認められた。

このアブラムシを北海道立十勝農業試験場の鳥倉英徳氏が同定したところ、リンゴクビレアブラムシであることが判明した。

本種は、従来リンゴにおいて、ムギクビレアブラムシと混同されていたが、鳥倉等(1986)によって識別法が明らかにされている。



宮城県病害虫防除所 菅野博英氏提供

成虫の体長は1.6～1.9mmで、体型は丸みを帯びている。体色は頭部が暗褐色、胸腹部は暗緑色、腹部後方は赤色を帯びる。尾片は体と同色か、淡黄色である。生態については、詳しく解明されていないが、りんご樹上で卵越冬する。4月中旬頃から幹田が見られ、二世代を經過し、6月には有翅虫が現れ、夏寄主であるイネ科植物に移動する。

本種の寄生による外観状の被害は目立つが、被害葉は落葉することなく、実害はほとんどない。このため、本種を対象とした特別な防除は不要で、発芽前に実施する通常のハダニ類とカイガラムシ類を対象にした機械油乳剤散布で十分である。